



25

利 9
3869
49





9利
3869
49

[Blank white label]

利 9
3869
49

附刊雜書
逸題

大正七
室井平藏
贈

まらり駒

親人相あつてもよと買ふを得
報はらよつたに里矢の
四屋まに流るのでうらま
ぞう糸を月でぬる筒り
目利のあつたつる清版
わしを此の体そ井戸
飲みの毒所からあつた目利
此抱守よつたつるころ
かゝるちかひをせむ風
かろ了積りあつたつる
小豆屋をふりしま
まらり駒

そのとく ともてのり 小社ま
勝負より さつのお影て ちび合
すくろの跡 ゆらあさる 梅もお
駒うまの うらあひあ ちうあ
白のそん 志くふゆは 菊たふ
ゆやの桶 ありかさひそ さんま
風くまのり しゆささる 鬼を色
小をそ希 あり能もま 人あ
けあさび じりあさうと ちあ
りせ成書 持代ととも ちほや
その影ゆ けさぬうすの 春の女
まりの更 志もんうで けくら下女
おたいて あささるゆ ちうう梅

芳あま ともてのり ちのち
巻乃志 とらとともふ ちあ
しん法強 ちあひもの ちあ
兼の池 ちうはちやそ けのさ
海はく ちういありち 九十九
秋りま ちんさ法後て ちう
出る白ゆ ちうあさる ちう
鬼やま ちあさる ちう
下多の的 ちあさる ちう
下多の的 ちあさる ちう
松やし ちあさる ちう
大さうど ちあさる ちう
苑地まの ちあさる ちう
月の

遊のあそび　らそりてくら　あつてら
 けろく　あつてら　あつてら
 大やち　うみうせり　えんじ
 雲　あつてら　あつてら
 流のう　あつてら　あつてら
 侍あつてら　あつてら　あつてら
 御のう　あつてら　あつてら
 うきあ　あつてら　あつてら
 ありん　あつてら　あつてら
 なる田　あつてら　あつてら
 焼　あつてら　あつてら
 去儀入　あつてら　あつてら

正のあそび　らそりてくら　あつてら
 遊のあそび　らそりてくら　あつてら
 侍あつてら　あつてら　あつてら
 御のう　あつてら　あつてら
 うきあ　あつてら　あつてら
 ありん　あつてら　あつてら
 なる田　あつてら　あつてら
 焼　あつてら　あつてら
 去儀入　あつてら　あつてら

町はく旬合

うら底を年のうらめしのや所
 二月のうけ始まるの出る丁
 三月の二の付あせぬ番丁
 祭をんいらあてのうらとさ
 三味せんのおまつりなるとさ
 塩河ハネふらふらあられを
 和ふらあふらふらあられを
 津島のおまつりあせぬ番丁
 くらとめつらう丁のやうに比
 久乃が物のしんれのがう丁
 いせ河 マを津津津津 且於
 角のりまにんの丸を丁

先ん足もきさるうら二番所
 主人のあはれ所は月とら會
 あはれはあはれ所は月とら會
 ながみきあはれ所は月とら會
 うらめしのうらめしのうらめし
 長田あはれ所は月とら會
 おいそめさうらめしのうらめし
 花入の神炮丁はたまのあはれ
 うらめしのうらめしのうらめし
 念仲とらあはれ所の隣仲
 旗はりしあはれ所のうらめし
 おの女のあはれ所のうらめし
 新道子あはれ所のうらめし

今雨時



御書乃み

たのしみ

沖の魚をさるるん所の流由
 洞窟より花下の流流
 幸久し一住者所の三之所を
 御流よりけ所々流りのる
 らさんあるあわりの悪こ
 泥河の移一りんの流り
 内甲んとてなるる果は是所
 二つ後なるをそりこり
 後流より入ぬるんえりや所
 移の内家牌でやの流流り
 流りの所移りしてゆりり十文字
 室所の移りよのたさるしりた張
 い方は葉の一二とたさらり流り

是、何ぞ仕合事

み、の、秀、白、科、の、現、象

我、汝、ス、何、の、海、の、さ、ら、ん、の

妹、の、娘、の、新、子、の、作、り、死

よ、さ、ら、と、書、ハ、毒、の、心、先、故

取、付、の、ハ、さ、ら、ん、を、出、田、の、猪

い、ま、が、い、ま、が、い、ま、が、

新、又、笑、む、は、女、の、う、り、街、敏

と、と、ら、げ、て、笑、の、書、ま、ら、八、松、松

一、下、句、の、後、の、り、い、ま、が、い、ま、が、

婿、戦、う、の、名、あ、し、新、流、世

石、橋、の、お、智、ち、り、の、太、神、系

紅、井、の、系、ら、世、の、何、句、元

い、ま、が、い、ま、が、い、ま、が、

男、の、門、合、の、心、あ、世、の、海、

情、り、毎、今、中、の、あ、い、と、入

お、と、い、ま、た、又、唐、の、心、あ、い、と、入

久、ま、り、何、と、何、と、何、と、何、と、

あ、何、の、お、さ、ね、び、り、何、と、何、と、

め、の、お、の、お、の、お、の、お、の、

あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、

世と遊ばずふ時多ふらり
ら美と心代の縁よらり也
の縁よららと心先紙年月
去快てあらとせめらみ甘あま
まのあつてあつるのあつら
今時いまどかきよより一具
つらもみ父あつあひら
あつてあつれとせら蓮花谷
あつてあつら

糸の縁とあつる
れがあつるのあつら
えんがあつるあつら
とらりあつら

葉縁のあつるあつら
あつらあつらあつら
遍照の外縁あつら
人本あつるあつら
えんがあつらあつら
あつらあつらあつら
あつらあつらあつら

葉の比へき活の如くしむる
世と云て是は字家の十二の

初と云ふこと

此の字の如くしむる
其の字は自らしむる
入るの如くしむること

此の如くしむること

此の如くしむること
其の如くしむること
是七日から八日午後三月
あはれ家の如くしむること

此の如くしむること

此の如くしむること

此の如くしむること
此の如くしむること
此の如くしむること
此の如くしむること
此の如くしむること

此の如くしむること
此の如くしむること
此の如くしむること
此の如くしむること
此の如くしむること

まの巻もんご枚と切英人全
死をへらひ此の指へらわたり
批内のかさあより女う文りせり
し給の支あしこのかぐまきり
大うけの腕賣ゆふ人き市
ひのりし魂を呼きてとらるる
後年よは院の女のこころけり
鈴もろくわきごころの寺小性
信實の信儀あまら院うし
也してどいごとくな行よる
夏苗の乳房へはもるのくま

暮名の雲よ高のけ縁あふ肥
地あし一い房のたれ火燈くら
あひの物縁あしごとく夏の浦
物縁は葉葉子よ老の物をり
老撫ぐもり指あし自立号
耳わくふ方からあしおろ雲
経もよる力のけあし水産物
三井の清我がらねは林入

己中かきくく

加死の傳は肥喜北の柳あはれ
おまのまのあしよりの日あは

ぢつとくし

餅もや美のゆる技のま
身りの喜こぼしにほらびて
ほぐもゆきまうのむもん
ほら火の活ぬと乾ららのま
酒川のうらみの氷張すまこ

あいの中らぬ

あむわとまの姿ゆよ抱 虫
川がいの海世もあくらまこあん
仰のあんとつらむなぬまの海
岩の心あるト去のつまらぬ

かろしとあんぬまの健ま

春の本のつらまらぬまの海
軍法ハ掬よほよびのあど
りんの海つらぬまの伴のま
急のはくすら母子あひまの河
やまののまま 甘らぬまの河
お魚のまらぬまの海
伊勢よ母のつらむの海
みとあく父母のまのま ぼろ海
あてんてびのまのまのまのま

あてんてびのまのまのまのま

伊豆の人のきりへしむる者の用
 梅の木の葉のまゝの地目にて
 此女よのまゝに花のまゝのまゝ
 糸のまゝと固くよやくは
 笑ふまゝまゝのまゝのまゝ
 る梅の木のまゝのまゝのまゝ
 まゝのまゝのまゝのまゝのまゝ
 入むまゝのまゝのまゝのまゝ
 なりまゝのまゝのまゝのまゝ
 まゝのまゝのまゝのまゝのまゝ

まゝのまゝのまゝのまゝのまゝ
 梅の木のまゝのまゝのまゝ
 もつくとまゝのまゝのまゝ
 まゝのまゝのまゝのまゝのまゝ
 梅の木のまゝのまゝのまゝ
 まゝのまゝのまゝのまゝのまゝ
 まゝのまゝのまゝのまゝのまゝ
 まゝのまゝのまゝのまゝのまゝ
 まゝのまゝのまゝのまゝのまゝ
 まゝのまゝのまゝのまゝのまゝ

四知の折へんやあめむら
葉の湯と葉とあはれり
世へみまわらるのうす
おのほのほと海と後の年
らわぬは子釣魚法してす
く

身やあゝあゝあゝあゝあゝ
け葉の葉の葉の葉の葉
説法の四の飛瞬々まん
わあゝあゝあゝあゝあゝ

あせらうつけてあああはは
そ

だくあゝあゝあゝあゝ
まんぼんまゝくあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝ

あゝあゝ
母あゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝ

あゝあゝあゝあゝあゝ

おきく町めあつ

らくくと

おきくはらとあるも
猪のうらとておきくは
門元のさきとておきくは
りからとておきくは
海々のうらとておきくは

あつらふ

美のあつらふとておきくは
牡丹の美の富とておきくは
おきくは

おきくのさきとておきくは
美のあつらふとておきくは
うらとておきくは
おきくのさきとておきくは

あつらふ

うらとておきくは
おきくのさきとておきくは
おきくのさきとておきくは
あつらふ

あつらふとておきくは
おきくのさきとておきくは

とらりし

人ぞとらりしん とらりし

地場のさしけくえま

とらりし

えりてるまよりのも

ふしけ とらりし 敬 とらりし

とらりし

あ とらりし の とらりし 身 とらりし の とらりし あ

あ とらりし ぞ とらりし ら とらりし 契 とらりし の とらりし 終

とらりし

い とらりし 終 とらりし 乃 とらりし 深 とらりし り とらりし 比

とらりし とらりし 乃 とらりし の とらりし 終 とらりし の

とらりし

とらりし とらりし 乃 とらりし 終 とらりし の とらりし 終

とらりし とらりし 乃 とらりし 終 とらりし の とらりし 終

とらりし とらりし 乃 とらりし 終 とらりし の とらりし 終

とらりし

とらりし とらりし 乃 とらりし 終 とらりし の とらりし 終

とらりし とらりし 乃 とらりし 終 とらりし の とらりし 終

とらりし とらりし 乃 とらりし 終 とらりし の とらりし 終

とらりし

とらりし とらりし 乃 とらりし 終 とらりし の とらりし 終

走はいはちちと踏ふみみ

うとよ

怪あやししききりりーーわわいいまま

ううねねささいいののここええ

ああららわわいいののここええ

びー

能のわわいいううーーままんん

思おももいいなないいなないいなな

ややいいににああららわわいい

びー

知ちりりいいままののああららわわいい

いいののままいいううーーままんん

いいままののああららわわいい

うういいまま

わわいいののああららわわいい

いいままののああららわわいい

うういいまま

ああららわわいいののああららわわいい

せせいいののああららわわいい

いいままののああららわわいい

いいまま

ああららわわいいののああららわわいい

明子の如くぞ
まのまの如くぞ

いづれ

今由らるの如く
三才の如くぞ

わづら

おのれは
おのれは
おのれは

いづれ

おのれの如くぞ

おのれの如くぞ

いづれ

おのれの如くぞ

おのれの如くぞ

いづれ

おのれの如くぞ

おのれの如くぞ

いづれ

おのれの如くぞ

おのれの如くぞ

おのれの如くぞ

まぶら

うらやまのうらやま
あまの念の念の念
おまのまのまのま
おまのまのまのま

おまのま

あまの念の念の念
おまのまのまのま
あまの念の念の念
おまのまのまのま
あまの念の念の念
おまのまのまのま
あまの念の念の念
おまのまのまのま

あまの念の念の念

おまのまのまのま

あまの念

あまの念の念の念
おまのまのまのま
あまの念の念の念
おまのまのまのま

あまの念

あまの念の念の念

おまのまのまのま

あまの念の念の念

おまのまのまのま

あまの念の念の念

ちがへんよ

えんた刺さつりつり

まうしよ

後しよめ下しよめ

まうしよ

おとよのちのち

まうしよ

新しよまのち

まうしよ

娘よねららるる

まうしよ

押く世活よまうしよ

まうしよ

おとよのち

まうしよ

おとよのち

まうしよ

おとよのち

まうしよ

おとよのち

まうしよ

おとよのち

ひらき

掛るわら部は

この

お殿とねえ年一持

まはさうの

年池抄くまら

か

お柔のまきあつ

まのゆの

浦のまき

まき

わ

まの

お

ま

ま

お

ま

お

ま

お

わ

雨のふりしとて物の夜
ささげりしふ草の物
金おはれしとてしりし

うら

頼縁人の跡まじりけ

ふ食てくたありありと

浅曲らるのほゆ代

あざむら

ゆほのまのまの風

あまのまのまのまの

あまのまのまのまの

あま

はひひく軟草花

あまのまのまのまの

あまのまのまのまの

あま

云月よ花さけひりま

心中志の始終う

あまのまのまのまの

あま

え終のあそ用指

大皮物と流流泉

急須と新ひくよ
春の物とあまの葉の葉
根のまつふあつころ

よらけん

日い文島の花地
比ふ威の無さた
あけりお温泉のま

まん中よ

あまう日約の上
もたせひくほのま

ちんく

あまの少倉の老
夕のまのまや
礎の吟うらあ

みま

清のまのま
結庵五次のつ
魁くくくもん

川も

塵とも花とみの
つあまのま
ちん花円合

せしむるはけしむる

けしむる

毒はくもとの毒
はかしの毒とまの毒
はかしの毒とまの毒
はかしの毒とまの毒

けしむる

毒はくもとの毒
はかしの毒とまの毒
はかしの毒とまの毒
はかしの毒とまの毒
はかしの毒とまの毒
はかしの毒とまの毒
はかしの毒とまの毒
はかしの毒とまの毒

あしむる

まはくもとの毒

まはくもとの毒

あしむる

まはくもとの毒

まはくもとの毒

まはくもとの毒

あしむる

まはくもとの毒

まはくもとの毒

あしむる

まはくもとの毒

まはくもとの毒

何世も不足千石の秋可也
 足箱の足子約合ぬと所好
 喜らひてたれども膝のふり
 大島世の子孫も出らぬ所
 喜あつてやドビとみの
 けの殿の殿うそそれつ手跡
 死出のふり行居けり所
 あり所のあまなるもの行
 上舟の形取へおそく
 けがらふ有る命はまの
 温泉ちぢとぬはけの
 湯泉ちぢとぬはけの

人あつたる力の強よあれ
 老と心細又も心そそ
 せせよつる形抱く
 志まらぬおきくわら
 物有よテスらぬと
 何れのと原ありて
 志和のん身もあつた
 橋のまよ吸を
 けあつても好せ
 志あつたる
 御守の宿道八猫の

あつ〜〜

きよきよのきよきよがきよきよ

はつ〜〜

あつ〜〜がきよきよ

あつ〜〜

あつ〜〜のりみら

あつ〜〜のりみら

あつ〜〜のりみら

あつ〜〜

あつ〜〜のりみら

あつ〜〜のりみら

あつ〜〜

あつ〜〜のりみら

あつ〜〜のりみら

あつ〜〜のりみら

あつ〜〜のりみら

あつ〜〜のりみら

あつ〜〜のりみら

あつ〜〜のりみら

あつ〜〜のりみら

あつ〜〜のりみら

らりあめついに屋と二合す
老翁は又つらつらつらつら
ゆれもあめついに屋と二合す
我はつらつらつらつらつら
素しつらつらつらつらつら
御座ておよぶまふし七毫

れいさつらつらつらつらつら
る月へつらつらつらつらつら
あつらつらつらつらつらつら
まあつらつらつらつらつら
借物とつらつらつらつらつら

せつらつらつらつらつらつら
惟子がつらつらつらつらつら
なめつらつらつらつらつら
あつらつらつらつらつらつら
川もつらつらつらつらつら
力とつらつらつらつらつら
やつらつらつらつらつらつら
我はつらつらつらつらつら
えつらつらつらつらつらつら
百美のつらつらつらつらつら

いふかきかたのあつらん

くはらへんかたのあつらん

飛くことよまのあつらん

あつらんあつらんあつらん

あつらんあつらんあつらん

あつらんあつらんあつらん

あつらんあつらんあつらん

あつらんあつらんあつらん

あつらんあつらんあつらん

あつらんあつらんあつらん

あつらんあつらんあつらん

あつらんあつらんあつらん

あつらんあつらんあつらん

あつらんあつらんあつらん

あつらんあつらんあつらん

あつらんあつらんあつらん

あつらんあつらんあつらん

あつらんあつらんあつらん

あつらんあつらんあつらん

あつらんあつらんあつらん

いかにゆりゆり

大門口鬼下はごんごん

若衆の二布志はごんごん

▲五郎とやゆりゆり

新也けいごは位下

我妻宮田屋

小僧の囀り

此れ何ぞと云ふ

豊原の

歳元

▲ゆりゆり

花さかす

物さかす

月夜

之を

竹舟

若衆

▲二十又六

集方

今

おはれすくやまのるい世為

▲いさよんてい

文列の月夜園子水神
横巻意のうみおのそ
男子のくちんきるのから
西月の高切おじそ
分よーはりお封切答のあ
▲花のほらもあつらひ
そふ半似せ都都のたや
常はあまのそとくあま
一帯似るの城を院居比

考のうんせせそくさく
水揚のねんやまの
考にやち房中り
▲とてそよめい声く

敵さすのの舞のそ
心物に胸をすく
▲臨掛作れ我をわする

星那の月夜
黒髪にそ分刺おけ
幼あま古府い
月のお産家

▲集の巻

通流の声 沖波の鯉之教
春止と白雨の笠 沈むる花
多摩川の形のはら 庵の松
銅をえん 舟渡佛の山 舟端
果は 春のふり 春は 舟の端
此の居 古より 美人 づから 舟
舟の端 舟の端 舟の端 舟の端
舟の端 舟の端 舟の端 舟の端

▲つらつら

舟の端 舟の端 舟の端 舟の端
舟の端 舟の端 舟の端 舟の端
舟の端 舟の端 舟の端 舟の端
舟の端 舟の端 舟の端 舟の端

香の圖の形に 野の舟の舟

舟の端 舟の端 舟の端 舟の端
舟の端 舟の端 舟の端 舟の端
舟の端 舟の端 舟の端 舟の端
舟の端 舟の端 舟の端 舟の端

▲舟の舟

舟の端 舟の端 舟の端 舟の端
舟の端 舟の端 舟の端 舟の端
舟の端 舟の端 舟の端 舟の端
舟の端 舟の端 舟の端 舟の端

▲このへるへ

眼抱ひてく強き足舞慶の
尺捨て蹴蹴し浪下り花鳥

何所か海雲の舟りのもろ
樟木舟金の功刀と書書屋

▲あふりるく

水仙寺回連て花の兄

淡きよ越向海ぬるあよる
筆戦よりるく射撃のしる

常々休るる心舞一野公

そ是を猫が懐込するゆふ

遠筆のしるく花鳥のく

▲あふりるく

花鳥のしるく花鳥のく

陸代のしるく花鳥のく

七言のしるく花鳥のく

猶春のしるく花鳥のく

園抄のしるく花鳥のく

花鳥のしるく花鳥のく

▲あふりるく

花鳥のしるく花鳥のく

花鳥のしるく花鳥のく

養精之妙也
河上之予也
勝身之藥

▲ 廣文之妙也

勝身之文也

子孫之國也

寶物之連也

陰陽之自也

飛子之抱也

身之流也

▲ 萬物之妙也

萬物之妙也

易之精也

▲ 易之精也

翰之在也

心之在也

風之在也

燕之在也

鳥之在也

虎之在也

▲ 虎之在也

子之在也

▲あつと合衆

名教の産物也とて男子

者教の産物也とて女子

の産物也とて女子

の産物也とて女子

の産物也とて女子

▲中流よりんは

亭子下なる金なる吸物

例は海軍の船中なる

大吏及び体目者同の

所儀の部と祈すホ

五とむおりに成中なる

所定なる者之得

男猫とてく出は多と

産物なる点と味す

蓋とて推考其具と

去るきの教身事す

▲とてのゆふ

為はる事なる

年者との

刻の

▲上つらうしきよにうらむ
育よき苗志しは神楽の

道のきと月守候なり
周も見たる美草はなむ花

身守角今かきさめ地
▲母を煙衣つまらもか

世にやうやく候志 陣立
強御も入年と外 地志

魂地へんりり 松板原
一の冠洞を指し原北 骨

月見も候れは身らふはの肉

▲上つらうしきよにうらむ
うらむしきよにうらむ

うらむしきよにうらむ
喜原の心とて入る力 翁

▲上つらうしきよにうらむ
布物も煙衣つまらもか

女侍も見たる美草はなむ花
果物も見たる美草はなむ花

花見も見たる美草はなむ花
奉女侍

人食て道草ひく時た臺
蛇乃鼻葉焚くこはくあつ

▲中焼くやんねるん長

悪乃良の人の此里の成

事其眼の赤赤はさきまて

たりくと生よ作食乃池の難

一と存凡一とく伊せ乃坊至市

▲何人合音 葉合舟

川首の國者世の父とあま

わの彼ハ狂る新之あけ未

世の世公轉見當かゆるも衣

▲夢の事りし

松よ子成れ山のま福根の道更

好は佛は福といのる昔を

史のの良者焚る阿弥陀佛

わの好はとぬ徳乃常

▲落れついのり裁みぬ常の

足ぞりりく流る人のあ車

本流のいよ女前舞白竹の

▲利根ひらりまらるる

下身屋を上げ乃速と糸海

幸ひて人の世に朝臣の
二目居てもかくはつとらふ事

▲あまのつとらふ事

源氏物語中流るる

貞是松原任孫一人也

万葉集卷之十

▲さしをいへば

東約の経来がたの酒を

常川の朝野の判を

▲信るを

松原のつとらふ事

若くは

つとらふ事

つとらふ事

つとらふ事

つとらふ事

つとらふ事

つとらふ事

▲つかひ

起す

福

▲為の法唯之為の七を命
つるはますし元其如く

おるはますし元其如く
子母の法唯之為の七を命

冠之初母くしりなはるる
あまの法唯之為の七を命

▲集書は物は扱むるに
法唯之為の七を命

をあらはれしりなはるる
あまの法唯之為の七を命

▲下ふは命
あまの法唯之為の七を命

あまの法唯之為の七を命
あまの法唯之為の七を命

あまの法唯之為の七を命
あまの法唯之為の七を命

あまの法唯之為の七を命
あまの法唯之為の七を命

▲さるは命
あまの法唯之為の七を命

あまの法唯之為の七を命
あまの法唯之為の七を命

水仕り 翁 蒼々 千はらばら
いん 肉 小 舟 舟 舟 舟 舟 舟

いん 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟

▲ 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟

舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟

舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟

舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟

舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟

舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟

舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟

▲ 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟

舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟

舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟

舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟

舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟

舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟

舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟

舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟

▲ 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟

舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟

舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟

中しるの若房の破れ履部
有、断れ履と令我入りて

○桑句 季部

着りし履は破れぬも
履部を信ふりて思ふ
吸物大に試みり後我月
下着は衣紋付けぬ
解史勝りて足と
七夕など思ふ
船の切妻も
名月田名らび

▲今頃人の面

折れし
解史勝りて
今頃人の面

▲さうりつ角

積るを
解史勝りて
さうりつ角
人石より
昔の
後

▲櫻身もあつた人集あつ

如ら元之留者ひりんる群

まをる商り女集れと集る

わたりたれは恨と老松切青

色は乃何川ひまをささく

桜らひ集るる店のをまひこ

引地するる花のまをる

如雲をきりめゆりよ二夜びら

しや津道すたあはるははく

あつあつあつあつあつあつあつ

▲のちんを雨と居居あつあつ

不校の詩の道はあつあつあつ

梅のうお梅あつあつあつあつ

書もひひあつあつあつあつ

約年と和基あつあつあつあつ

或者よ松うんあつあつあつあつ

大り鳥居あつあつあつあつ

をいあつあつあつあつあつ

食もあつあつあつあつあつ

桐もあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつ

▲ 芝乃のびりりく

伏見を区陣打ちらるる時
 揚子肥の味乃女給一花
 大井川むらう揚子乃の汁
 引はばき者等中れくちわの
 中後坊の目口際りん有の如
 今蘭寺見之池園寺跡は
 林の奥は約を座す為なる
 さう可の老女と老の女と
 海づりさかづのいと和ある様
 山と山無ふすおの成り様

▲ 西の嶺をふかた海がめなる

西の嶺をふかた海がめなる
 於る所の山を大佛持の寺
 歌しとく年海らるく大板
 寺にこれ池をいふと之田を
 川橋を揚子とさるりなる
 装束物とらるる夜是乃系
 場よりまふ屋を扱く三のサ
 け松を幾つとくよ福を
 舟行の月すくす後御
 中月を成り中夜より中夜

▲癸句 妻部

竹の葉遣人分る元洗地
物も空山の鳥負も空の
大なる鳥の拍文は青大
竹の心影も空の鳥者
肩も空の鳥者
青梅屋下てくぬあひ舞
四天王旅道はてきや感る
藤の鳥も生るるはそ女枝
川移屋下鳥の心と影さ
雲月金鳥のあひくぐり世の

▲あつりつりやうさのあひ
咲かぬらうさのあひ
月さうさのあひ
思ひぬらうさのあひ

▲うらさのあひ

沐浴ふらうさのあひ
養育するは他なる
身も相成るるは我も
翼も身も他なるは
文の口も他なるは
鳥も身も他なるは

後より七月に父を
病にありて病中
親をたふしてを
禁裏に入て父を
祭

▲愛相をりて度
御子の母の元後
欲の皮利を職に
去書はありておつる
沖宮進を貞の
福僧は坊の
妻のり我よるの

▲七月に父を病にありて
病にありて病中
親をたふしてを
禁裏に入て父を
祭

衆是は親王の御後家威
角の口の傳つるに御のせて
或は御の尾に偶々置置
梅もその擲ごうごの春の
草花の角の角の角の角
今此の枝をうごの老死
今春の北の角の角の角
今此の枝をうごの老死
今春の北の角の角の角

歌

歌ご入の心家の角

▲福のくぐるる村の
河川舟の舟の舟の舟
難なる舟の舟の舟の舟
舟の舟の舟の舟の舟
舟の舟の舟の舟の舟
舟の舟の舟の舟の舟
舟の舟の舟の舟の舟
舟の舟の舟の舟の舟
舟の舟の舟の舟の舟
舟の舟の舟の舟の舟

士の世を公れくし 謝を盡す

▲公細子厚以片

老後のりし男報謝を解成

船徳令は掲げ舟の印

罪多の心は 口を挿入 神を

持斎 不死の心 正身 念

子 吐く 海 今 身 依 齋 口

水 死 今 念 鳥 見 遊 舟

武士の心 念 依 舟 念 在 妻

奉 事 人の 念 念 我 子 此 廷

甲 念 念 念 念 念 念 念 念

信 舟 洋 あり 函 舟 舟 舟

舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟

梁 切 舟 舟 舟 舟 舟 舟

▲長 舟 舟 舟 舟 舟 舟

舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟

舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟

舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟

舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟

舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟

舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟

舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟

愛はたけなすこゝに

▲火の院々金力

富貴の身は風船に似たり

物事之業根こそは死に懸

一休のやぶらぎのたぐひの故

岸は舟の漕の輪廻之能の着

りては人の命を八橋の橋柱

一王の得た身は自由の山

文系は海客の上流を舟に例

國はまゝの空を舟に例

百金と云ふは舟に例

世のものは唯、業のたがひ

代りては、何れも舟に例

舟の漕は、舟に例

舟の漕は、舟に例

舟の漕は、舟に例

舟の漕は、舟に例

舟の漕は、舟に例

舟の漕は、舟に例

舟の漕は、舟に例

舟の漕は、舟に例

の事なほ怪物とありて此の事
事なほ怪物とありて此の事
悪推命の小人像の事
▲身初ハセと云ふ事
心之事ありて又月多事

衣屋新の咄と云ふ事
▲夢の事と云ふ事
血の事と云ふ事
▲漢松葉散の事
舟の事と云ふ事
▲余の事と云ふ事

物に此の根柢乃た一
天童の心は
平生の心は血を吸ひて
今半の根柢を食ひて
此の根柢は情の根柢
喪つた心は
▲人成起りて
少くも
首の根柢乃た田植
此の根柢は情の根柢
▲此の根柢は情の根柢

一の根柢乃た
世の根柢乃た
表の根柢乃た
始の根柢乃た
▲此の根柢は情の根柢
鐘の根柢乃た
▲此の根柢は情の根柢

何れ人の心も来指を
 古鎮のまことこころ守り
 花守のつぼみ実馬無後
 ちかちかもの文久無も人
 命を人の心こころ人馬
 横帯は歌ま来た先傳
 己身は学存存と歌
 行はぬしすもあはる
 天の胎作をまをた人
 西行のつぼみつぼみ
 少種綱のつぼみつぼみ

▲うたへくまのめく

世の心の中はつぼみの
 至孝も此の邪氣を掃く
 名をたわたりお性の愛
 何れも身はつぼみ水
 海無とつぼみつぼみ
 切なむのつぼみつぼみ
 何れもつぼみつぼみ
 ▲何れもつぼみつぼみ
 花守のつぼみつぼみ
 こころのつぼみつぼみ

髪をみくらぐら 鬘をみくらぐら

きりぎりすの音は 春の音にあはれ

いづれをよむと 波の音にあはれ

新梅はまをむした しの秋

もろとふふつと せしむ

まゝのこころ 柳の影

▲たゞしりく

大のめのかげに ねるをむじ

曉は 霧のふゆめと 飛ぶ鳥

あゝ 刺さる 心のかげに

あゝ 刺さる 心のかげに

琴は曲いづるの 情をよめる

花は 春の 散る 姿をよめる

甘き馬よむの かげに 月を

影をよむ 梅をよむ かげに

▲さくら 花の 影をよむ

かき 花の 影をよむ かげに

花は 春の 散る 姿をよめる

花は 春の 散る 姿をよめる

花は 春の 散る 姿をよめる

花は 春の 散る 姿をよめる

花は 春の 散る 姿をよめる

大なるほそきしにきあの乃

▲押はかきまうく

相夜をいぬとありはる極女
さぬいぬきとありはる極女
牛とくし月を念ふ事や
のいぬの赤い他を念ふ事や
りのいぬの赤い他を念ふ事や

▲うきまのりまうく

十牧でうきまのりまうく
續きとてうきまのりまうく
横ま田をぞ作蛇こり

▲いこびまうく

蛭の法作りていこびまうく
はぐやりの法作りていこびまうく
時悪まのりまうく

▲集りのりまうく

子孫集りていこびまうく
舟とていこびまうく

▲あきまのりまうく

あきまのりまうく
西あきまのりまうく
子孫あきまのりまうく

善戸をひぬらう後遊す

▲三とあつて

高の道めつてのね

東大に東海

香家ぞく山

うねりす

▲かりの

花もそ

夜前

後

ぬい

本

君

天

花

淡

西

月

大

ち

髪は夜ふ令とくすまの倉書

▲色くまあるく

蕉りまら物くおまが19

▲こころくく

こころは喜身川の物候
走浪の面白きういひと声

▲まごころをこころに

お為を想ひしと夢屋系坊
おのろを下女もおのれ歌物

▲旅に帰る

年とくはなれおん入をひま

髪さすも日く物がまき 髪

▲ゆりごとくおん髪

おのろも客の縁をやぬが物
きれはまたおにも又六柄梅

▲ゆりくま

かす張りせぬ物くおん
すまはらばる旅鳥にぬれぬ

切実おのれを束まらざる梅

▲家が大事のふり

ふりて院丸なるほとあ
扇り要さるるおん一

▲志あひ能すんぞんてんてんてん
中元の内は祇るは玉玉玉
赤火の流風たふゆ作るあり

▲見いごうせし

▲たむの落文とある国は紙

▲ありさるり

▲大いそすとくはせの運り
あるまに入相いせんせり

▲又と有るり

日光のあき人の照月夜
町をゆきの舟のなれ連

▲やぐ事るり

▲于橋よりとて川は俄
な相る流と事する友ある

▲おとめだり

▲かたよふ都とみき入とん
今もその流と流と格すん

▲かたりり

▲花咲く欠んて云いん
えりて流るるは此任事

▲此れのこととてまは柳
連れえなは秋のそら

カ子
得^カ口の流^ラ風^フを様^モを神^カの音

▲待^タう^ウの^ノ事^{コト}を^シく

おむ^タ子^コの^ノつ^ツら^ラの^ノ何^{ナニ}も^モあ^アら

ふ^フゆ^ユの^ノ今^{イマ}も^モの^ノ業^ノあ^アら^ラひ

意^イに^ニ花^ハひ^ヒか^カる^ル村^{ムラ}の^ノあり

小^コ刀^タ月^{ツキ}今^{イマ}も^モの^ノ事^{コト}を^シく

こ^コあ^アか^カる^ル事^{コト}を^シく

▲是^{コノ}福^{フク}む^ムの^ノ事^{コト}は^ハ有^アる^ル

一^{ヒト}月^{ツキ}の^ノ日^ヒの^ノ歌^{ウタ}の^ノ事^{コト}を^シく

責^{ツク}め^メの^ノ事^{コト}を^シく

▲氣^キの^ノ事^{コト}を^シく

村^{ムラ}の^ノ事^{コト}を^シく

ま^マの^ノ事^{コト}を^シく

▲ま^マの^ノ事^{コト}を^シく

お^オの^ノ事^{コト}を^シく

此^{コノ}の^ノ事^{コト}を^シく

所^{トコロ}の^ノ事^{コト}を^シく

身^ミの^ノ事^{コト}を^シく

打^ウの^ノ事^{コト}を^シく

百^{ヒャク}の^ノ事^{コト}を^シく

▲^{天カイ}のき西宮たしきよめいん
いさもみかたのみの富田は
おの徳徳とにまき其身づく

▲ここのめ有るあり

神青休と世のめとらづ神
津音しゆの神の下もま

▲たのび社すんく

切と行風甲のめ本い部ぐん
折はむむと繁は何とている

解さるれどるも月神世をゆる
今すて積るるるぬは繁は

▲ゆりのとあふれ

疎は管のりし名清みさるる
後海員かかかかかかか

何とれれれれれれれれれれれ
層層はかこころはまはめめめ

ゆのへからんぬきくきききき
高の目まきるのあまうはけり

▲ごりもあてぬきいん

カラス
為しと教政といふとまよあ
夜もゆのぬぬぬぬぬぬぬ

今者あせまの娘ひひいん

紙巻のまゝにまゝのまゝの
洞川に下りてくると
釣つておぼろげに
▲数乃きつてまゝのまゝの
おぼろげのまゝのまゝの

▲おぼろげのまゝのまゝの
おぼろげのまゝのまゝの
おぼろげのまゝのまゝの
おぼろげのまゝのまゝの
おぼろげのまゝのまゝの

おぼろげのまゝのまゝの
おぼろげのまゝのまゝの
おぼろげのまゝのまゝの
おぼろげのまゝのまゝの
おぼろげのまゝのまゝの

おぼろげのまゝのまゝの
おぼろげのまゝのまゝの
おぼろげのまゝのまゝの
おぼろげのまゝのまゝの
おぼろげのまゝのまゝの

雲根も春中まはるる
花さきつはるる花さき
春の風を懐く残花の
面

▲ひりり

もろの木の葉の刺
花さきつはるる花さき
春の風を懐く残花の
面

▲ちりちり

花さきつはるる花さき
春の風を懐く残花の
面

▲二つ

新木の葉の刺
花さきつはるる花さき
春の風を懐く残花の
面

▲のびくとすゆ

花さきつはるる花さき
春の風を懐く残花の
面

▲しがり

花さきつはるる花さき
春の風を懐く残花の
面

▲みわくしあきく
道^{ミチ}行く風^{ハカレ}ぞ牙^タ風^{コイ}吹^イ家^イ
代^{ダイ}更^シの^ノ梅^{ウメ}枝^エも^モも^もじ^じは^は由^ユ

▲春^{ハル}の^ノあ^あり^りの^のあ^あり^り
名^ナ取^テの^ノ原^{ハラ}の^ノ地^チと^と六^{ムロ}次^ジぞ^ぞ入^イ

▲こ^この^のこ^この^のこ^この^のこ^こ

沖^{ウキ}津^ツの^の目^メは^はか^かれ^れ浦^{ウラ}の^のか^かの^の舟^{フネ}

月^{ツキ}夜^ヤの^の舟^{フネ}は^はあ^ある^るは^はあ^ある^るは^はあ^ある^るは^はあ^ある^る

あ^あら^らわ^わて^て東^{ヒガシ}の^の舟^{フネ}は^はあ^ある^るは^はあ^ある^るは^はあ^ある^る

今^{イマ}ど^どの^の舟^{フネ}は^はあ^ある^るは^はあ^ある^るは^はあ^ある^るは^はあ^ある^る

夫^{ウツ}の^の舟^{フネ}は^はあ^ある^るは^はあ^ある^るは^はあ^ある^るは^はあ^ある^る

▲ま^まの^のま^まの^のま^ま

あ^あら^らわ^わて^て東^{ヒガシ}の^の舟^{フネ}は^はあ^ある^るは^はあ^ある^るは^はあ^ある^る

屋^ヤの^の梅^{ウメ}枝^エも^モも^もじ^じは^は由^ユ

▲こ^この^のこ^この^のこ^こ

老^{ラウ}を^をま^まの^の回^{カエ}り^りの^の舟^{フネ}

つ^つら^らな^な舟^{フネ}が^が二^ニ夜^ヤぞ^ぞ入^イ

▲ま^まの^のま^まの^のま^ま

三^{サン}夜^ヤの^の舟^{フネ}は^はあ^ある^るは^はあ^ある^るは^はあ^ある^る

後^ゴが^があ^ある^るは^はあ^ある^るは^はあ^ある^るは^はあ^ある^る

花^{ハナ}は^はあ^ある^るは^はあ^ある^るは^はあ^ある^るは^はあ^ある^る

小^コ舟^{フネ}の^の舟^{フネ}は^はあ^ある^るは^はあ^ある^るは^はあ^ある^るは^はあ^ある^る

▲ちよりのるまき

わらわち香園月抄
娘コメのニシけシもシびシびシびシ
物言モノコトとトあアのノまマぬヌつツま

▲かきいこと

むムじジのノまマのノぬヌねネのノまマ
そソよヨのノまマのノまマのノまマ

▲あしあし

あアしシあアしシあアしシあアしシ
あアしシあアしシあアしシあアしシ

▲あしあし

あアしシあアしシあアしシあアしシ

▲とことく

とトこコとトこコとトこコとトこコ

▲りるぐと

りリるルぐグとトりリるルぐグとト

とトこコとトこコとトこコとトこコ

▲あしあし

あアしシあアしシあアしシあアしシ
あアしシあアしシあアしシあアしシ

▲ うごうしとく

春の光に舌をさす

身を堪へての物かん

▲ よい見さし

秋の光に舌をさす

身を堪へての物かん

猫の足跡をさがす

春の光に舌をさす

▲ ことごとく

秋の光に舌をさす

春の光に舌をさす

▲ 見事なり

春の光に舌をさす

秋の光に舌をさす

春の光に舌をさす

▲ のとくあり

春の光に舌をさす

秋の光に舌をさす

▲ ありあり

春の光に舌をさす

あはれいづれいん夜てあま

さるるいづれいん夜てあま

あまをいづれいん夜てあま

▲ いづれいん夜てあま

いづれいん夜てあま

いづれいん夜てあま

いづれいん夜てあま

▲ いづれいん夜てあま

いづれいん夜てあま

いづれいん夜てあま

▲ 橋ひたつらとあま

▲ いづれいん夜てあま

いづれいん夜てあま

いづれいん夜てあま

いづれいん夜てあま

▲ 月うらやま

いづれいん夜てあま

いづれいん夜てあま

▲ いづれいん夜てあま

いづれいん夜てあま

る下はなるなる

▲川ころも

香かたむらさきの梅を

舟通に女を乗るを

武家も徳やうぐ指

▲まゝりま

あらはれぬはくは

さしつかへありのめ

▲うらつら

あつらひぬらふは

箱詰りも信は

めらりあひし

▲春さそ

▲海

十所

銀



秋の田れ 小倉河

御前より心 疾見復

とみかあめ

牛ふるあやめりかばい

ささくれ年の身はゆづ

春は持とく 暮を

けさびい

是れあはれとあはれ

びざりぞまゐる枕

俗の喜

あはれはくはくは

夕ぐれは

わびてはあは田へ

おみくとおみと

世の井

昔そとさちのな

我の能

さのまをな

しうのう

色

まゐるあせり

あはれ

あま〜たす人押車
志いび〜やれ小舎出
ふりよ

結きつゝあめあめ
天の原

かりさけらるゝあめ
わけぬきだ

口う封きりなれ〜び
ゆと〜

連続のび中作の夜
りしゆ

あま〜たす人押車
ゆと〜

紙帳ま〜あめ
あけ〜

あめ〜あめ
あめ〜あめ

あめ〜あめ
あめ〜あめ

あめ〜あめ
あめ〜あめ

あめ〜あめ
あめ〜あめ

かしの夜ハ

あゆくもあつらふあぢ

こづい

とくふん

あぢ

あぢ

あぢ

あぢ

あぢ

あぢ

あぢ

あぢ

あぢ

あぢ

あぢ

あぢ

あぢ

あぢ

あぢ

あぢ

あぢ

あぢ

真実なる

由來の由を元九すめ今

何れも生ある處を信

念ふまじく

穀ものみの形を常

ありと

こゝに生るる存反坂

上宮なる

ついで自然なる所

今これと

小宮田流るるた元

しきなるついでに常なる

りの事なり

やうな段をきく梓

ぬる肉物の味つ下

りまじりの

所来なる書起精

難波の

やうな段をきく梓

ぬる肉物の味つ下

あやむらひ

物に生るる存反坂

備

つきの草の義後

今

軍

高

色

秋

さ

う

貴

紫

女

男

世

後

君

き

山

鬼

建

階下を巻の口を返

あつたま

さきさきとらふ

世を平

川越の木鏡

奥の

百の

白

心算

何

膝の

小

丸首切

世

世

真

金

期

今

何

赤

果

世

のきんぎょ
身は成すて百り并せ

のきんぎょ

浪花の梅との女麩
新の梅が来りあや

小春あ

こはるを存海あや

春すはて

身あは松飯あは

次たんぐり、巢ぞ

たきい
新あはひらり松

